

こんな  
活用法が  
あった

むらのピンチをチャンスに  
楽しく変える、あの手この手

小麦を播いて  
「虫送り」の  
麦稈ほっかんに、  
まんじゅうに

千葉県九十九里町田中集落

文＝編集部  
写真＝高木あつ子



「田中交遊倶楽部・自然塾」代表の大塚徳郎さん。塗料メーカーを定年後は、田んぼ70アール、畑30アールで農業を営む



3年放置された畑はジャングルとなり、自動車まで不法投棄される



## 立ち上がった むらのオヤジたち

「ごくろうさま。朝から冷えるね」「今年の小麦はどうかね」

2月初旬の日曜日。寒空のなか、昨年の11月下旬に播いた小麦の麦踏み作業をするのは、千葉県九十九里町の「田中交遊倶楽部・自然塾」の面々。市街地から車で20分、田中集落（52戸）の住民が中心となる地域おこしグループだ。

自然塾のメンバーは、元会社員の大家徳郎さん（67歳）を代表に、自営業や建築士、陶芸家、定年帰農など12人。53〜72歳の団塊世代を中心とした「むらの飲み仲間」が、月に1、2度集まっては「定年後はなにをしようか」と、ワイワイガヤガヤ意見交換をするなかで、2003年に設立した。

「これから田中集落をどう盛り上げていくか。田畑の荒廃もすすんでいたの、まずはむらの景観をよくしようや」という話になった」と、大家さんは当時をふり返る。

1960年代まで、田中集落には専業農家が30戸ほどあった。水稲を軸に小麦やサツマイモ、ラッカセイをつくっていたが、高齢化とともに離農がすすみ、いまでは

わずかに3戸となった。

そんななか、1990年代から耕作放棄地が急速に増えてきた。

「草刈りを1年しないだけで、セイタカアワダチソウやクスがぐんぐん伸びてくる。3年も放置すればジャングルだ。空き缶やビンだけじゃない。冷蔵庫やテレビ、自動車までどんどん捨てられる」

そうした農地の荒廃は、高齢農家が耕作を断念したところとは限らない。すでに地権者がよそに引っ越してしまい、不在地主化している農地も多い。だが、私有地のために行政が勝手に整備するわけにもいかない。集落の問題は集落の力で解決するしかなかった。

## 44年ぶりに 「虫送り」を復活

「耕作放棄地の活用といっても、自分たちが楽しめることがなければ長続きしない」。議論を重ねるなかひらめいたのが、集落の伝統行事「虫送り」の復活だった。

虫送りとは、イネが穂をつくる7月下旬に、麦稈（麦から）と竹竿でつくる松明に火をつけ、イネの害虫を明かりで呼び寄せて炎で駆除する豊作祈願の祭りのこと。農業がいまほど普及していない1